

ておくことが非常に大きな参考となることも云うまでもない。スライドのように時間に制限なく、じっくりと見て貰うために最適の演題が揃っていると考えられる。

(竹内久彌)

SE-4-1: Management of Pregnancy and Labor

妊娠中とくに妊娠末期における妊婦の管理と陣痛ならびに分娩の管理方法は産科領域におけるもつとも重要な問題であることは言をまたないが、この問題に対する基礎的また臨床的な立場から、生理、病理、または生化学的なアプローチが必要である。

当セッションにおいては、特に分娩時における妊婦の子宮頸管系の動態に関して、さまざまな角度より検討が加えられ、さらに妊娠過程の母体環境の変化に伴って、正常胎児発育状態とのズレとしての SFD (IUGR) や、予定日超過妊娠の問題についても基礎的ならびに臨床的立場から数多くの新知見が記述されている。

アルゼンチンの L. Juan (ブエノスアイレス) は、「High Risk Pregnancy における診断および処置に関する実際のガイド」についてのべた。High Risk Pregnancy の診断法については各種の方法が提案されているが、これらの方法を実際に行うにあたっては、個々の妊婦について多数の検査方法を組み合わせて、同一条件下で注意深くモニタリングする必要性を強調し、実際のガイドを示した。

また High Risk Pregnancy の重要な分野である SFD については、森山(島本)郁子ら(奈良医大)は、「SFD の成因と対策に関する実験的研究」について述べた。すなわち SFD の成因とその治療法はなお未解決の点が多く、基礎的な多数の情報が必要とされているが、同グループは臨床上の諸問題をふまえて、動物実験の場において多くの新知見を見出し、将来の治療と対策の問題に対して貢献するところが大きいものと考えられた。

次に分娩について子宮頸管系の動態とくに頸管の開大機構は重要な意味をもつもので、殊に頸管コラーゲンのもつ生理、生化学的意義が明らかにされる必要がある。

一條元彦ら(奈良医大、東北大)は、「分娩時子宮頸管開大機構の生理、病理」について研究し、コラーゲン線維の質的な変化に伴って熟化がおこることを示した。これらの研究はさらに生化学的な検討と臨床診断への応用の可能性が期待される。

また平川舜は、「ヒト軟化子宮頸部におけるコラーゲンの動態」について研究し、前者と同様に質的差違のあ

ることを示したが、コラーゲン分画の成績が一条らの報告と若干の差がみられた。さらに、これらのコラーゲンの質、量の差は局部におけるコラーゲナーゼ活性の差に対応するとのべていることは注目すべきであろう。

上述の生化学的なアプローチと共に物理的なアプローチについても報告が行なわれた。

住吉好雄ら(横浜市大)は、「頸管開大の再現表示に関する研究」を行い、子宮口の開大度をサービメーターを用いモニタースコープ上に再現し、より確実な診断法とすることに成功した。

また一方、木野秀郷ら(順天堂大)は、「妊婦の子宮頸管脈波」を研究し、子宮頸部に光電容積脈波計を装置し、それよりえた脈波の波形分析を行つたところ、妊娠時期より特徴的なパターンがあることが示された。

血液の動態に関しては、布施養慈ら(東邦大学)は、「妊娠と血小板拡張能一とくに妊娠中毒症との関連について」の研究を行い、血小板の拡張度を指標として妊娠の各時期および妊娠中毒症について200例を検査したところ、中毒症例に異常高値を示し、他の臨床症状と平行することをみとめ、その拡張能の生化学的機序についても考察を加えている。

これらの諸報告は、いずれも基礎的ならびに臨床的に価値ある業績であり、また分娩の頸管因子の複雑さを示すものであり、一方では high risk pregnancy とそれに伴う SFD の成因と治療についても今後の一層の基礎的、臨床的研究の発展が期待されるものである。(森山郁子)

SE-4-2: Management of Pregnancy and Labor

産科学というものは理論もさることながら結局技術論が主体をなすものである。日常临床上創意工夫された技術手技の集積が母児の安全性の向上に寄与しているところが大きい。

日本国内においてさえ各々の経験豊かな臨床家がそれぞれ門外不出の手技秘法をもっているものである。今回の世界的学会においてもこのような日常臨床に直結した報告が出されていることは有意義であるといえよう。

さて Paciornik Cláudio らは坐産について報告する。歴史的にみると今日の近代病院における臥床分娩形式の日の浅さいことがよく理解できよう。今日でも中南米諸国、その他では坐産が踏襲されている。生理学的に臥産と坐産とどちらが有利で合理的か、解明されるべきであるが、本報告はそれに解答を与えてくれるものと期待される。本邦でも坐産のリバイバルブームは有名病院に